

北海道中国帰国者支援・交流センター

〒060-0002 札幌市中央区北2条西7丁目1番地かでの2・7

電話 011-252-3411 FAX011-252-3412 URL: <http://www.hokkaido-sien-center.jp/> E-mail: [hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp](mailto:hokkaidocenter@dosyakyo.or.jp)

## 令和2年度「中国・樺太帰国者を知る集い」

## 帰国者それぞれの圧倒的な事実

9月12日、「中国・樺太帰国者を知る集い」が開催されました。現在も続く新型コロナウイルス感染症の影響の下、参加者数も限定しての開催となりましたが、中国残留邦人等の体験と労苦を伝える語り部の講話を聴くなど、充実した内容となりました。

## 重みのある本人の言葉



「知る集い」の前半では、札幌市に95歳になる現在も単身で暮らす戸倉富美さんの証言映像(厚生労働省制作の証言映像集「運命の軌跡」より)が上映されました。出生から84歳で帰国するまでの戸倉さんの人生が、実直な口調で語られ、本人の口から、その体験を聞くことの貴重さを感じることができました。「私も苦労したけど、苦労したって言わないよ」「戦争は勝っても負けても、みんな苦労する」という言葉が重みをもって響きました。

## 無駄にしてはならない苦難の生涯

「知る集い」後半では、中国残留邦人等の体験と労苦を伝える戦後世代の語り部として3年間の研修を終えた巻口清美さんが、満州に取り残され、生き抜くために現地の中国人の妻になり、33年の年月を経てようやく帰国を果たした祖母巻口シズさんの苦難の生涯を、その手記や手紙を引用しながら語りました。

参加者からは「圧倒的な事実言葉が出ない」、「自分の祖父母が満州にいたが、帰国できたのはとても



残留婦人である祖母の生涯を語る巻口清美さん

幸運なことだった」という感想が寄せられました。巻口さんが祖母の人生を語り継いでゆこうと決心したきっかけは、「追懐の情」と題された祖母の手記を読んだことだった、と巻口さんは語ります。自分自身が何者なのかという長い葛藤の中で、祖母や両親が苦勞をして自分に命をつないでくれたことが、手記をとおしてやっと理解できた、そして祖母の体験を無駄にしないために、祖母が残してくれたものを伝え続けなければならない、と結びました。

～後日巻口さんからセンターに寄せられたお手紙(抜粋)～

語り部研修を通じて、祖母シズの生涯を知ることとなりました。この重みのある一生涯は残留邦人ひとりひとりが持っているものだと思います。祖母シズをとおして多くの人に理解して頂けるよう、精いっぱい頑張りたいと思います。この歴史、残留婦人、孤児の歴史は私たちの家族史でもあります。これまでは知る機会もなければ、知る力も強い精神力もありませんでしたが、彼らの苦難の人生を振り返ることで、ひとを元気づけることもあると思います。この歴史は特に残留邦人の次世代に知ってもらいたいと思っています。

三つの行事をひとつに

はじめての試み「帰国者文化祭」

10月3日、東区民センター大ホールで帰国者文化祭が開かれました。今年は日本語教室の学習発表会、樺太帰国者交流会、中国帰国者新年会がひとつになり、料理を準備したり、持ち寄ることはなしで、日本語発表や踊りをみんなで鑑賞する会となりました。中国・樺太帰国者、日本語・パソコン教室の講師、そして一般の支援者など50余名が参加しました。

学習発表はビデオ上映



日本語学習発表は、受講生によるスピーチをあらかじめ録画して、上映するかたちで行われました。テーマは自分の好きなことや最近の嬉しかったこと、印象に残っている出来事など。もちろん残留邦人、あるいは配偶者としておかれた環境からくる日本語のレベルの差などはありますが、今も日本語学習を頑張っているという点ではみな同じ。お互いの成果を見て励ましあう機会となりました。

楽しいプログラムも



太極拳教室の発表、北海道中国帰国者連合会広場健康ダンス倶楽部による踊り、当センター所長も特別出演した樺太帰国者有志によるパフォーマンス「白鳥の湖」も披露されたほか、センター事務局で作成したおもしろ動画やクイズ動画など、みんなで楽しめるプログラムもありました。



最後はみんなでダンス！

文化祭終盤は、踊るのが大好きな帰国者のためのフリーダンスと中国の大ヤンガー。中国・樺太帰国者が自由に踊り、一緒になって練り歩く姿はとても印象的でした。「久しぶりに心から踊った」と語る帰国者もいました。新型コロナウイルス感染症にまつわる状況はいまだに厳しいけれど、帰国者がそれぞれの文化だけでなく体験も共有し、楽しいひとときを過ごすことができました。

稚内・地域生活支援推進事業

郷土を知る旅「宗谷管内を知る」

稚内の「孤立しないための拠点づくり」事業は、今年度から委託先が稚内日口経済交流協会に代わりました。

やはり今年度は、しばらく行事はお休みでしたが、稚内市で「市民お出かけキャンペーン」が実施されたこともあり、8月に白帰りに旅行が企画されました。宗谷管内で、今まで行ったところのないところに行こう、ということで浜頓別町のクッチャ口湖、枝幸町の三笠山展望閣、中頓別町の鍾乳洞を見学しました。また中頓別町では砂金掘りも体験しました。小さな砂金の粒を見つけた人もいて、ガラスの小瓶に入れてもらって、持って帰ることができました。

参加した帰国者は、「自分たちではなかなか行けないから、ありがたい。年をとると家に閉じこもりがちだし、コロナの問題もあるし。こういう機会をとおして、また何か新しいことを知ることができる」と話していました。



~支援者紹介~



NPO法人日本サハリン協会稚内支部の理事であり、稚内市の支援・相談員として長年帰国者の支援に当たってきた古川章子さん。日本サハリン協会を受託した当センターの「孤立しないための拠点づくり」事業でも企画を担当していただきました。昨年度稚内市の支援・相談員を辞し、委託先が稚内日口経済交流協会に代わった現在も、帰国者とのかかわりを断つことなく、行事にも参加しています。

古川さんは樺太の久春内（イリインスキー）生まれ。樺太に渡ったのは古川さんの祖母の代です。樺太から引き揚げた時、古川さん自身は2歳。そのため樺太の記憶はほとんどありませんが、「やはりどこかに思い入れがあり」、子どもも大きくなり、時間ができた頃、ロシア語講座に通いはじめました。

そこでサハリン協会（当時は樺太同胞一時帰国促進の会）の関係者と知り合ったことが、帰国者支援にかかわるきっかけとなりました。

稚内に樺太帰国者が定着することになったとき、古川さんは日常生活の相談に乗ったり、助言をする身元引受人になり、本格的に帰国者支援に従事することになります。それ以降の20年間は無我夢中。帰国者の持つ文化、環境からくる考え方や、価値観に驚くこともありましたが、「あまり深く考えずにやっていた。あらためて振り返ってみると楽しいことばかりだった」と言います。

長年の古川さんの奮闘のおかげで、今は帰国者のみなさんも困ったらどこに行けばいいかわかっており、そんな帰国者のことを、古川さんは「本当にたくましい人たち」と言います。「わたしだったら、言葉もわからない国で暮らすことなどできない」。古川さんの言葉からは、帰国者に対する共感と敬意が感じられます。それが原動力でもあり、現在の成果にもつながっているのかもしれない。

交流事業「いけばな体験」

日本の伝統文化を体験



8月24日と9月2日、二回にわたって「いけばな体験」が開催されました。今年はバス旅行などができないため、室内でできる文化体験として、いけばなに挑戦することになりました。

講師は「北海道いけばな連盟」評議員の中村郁代先生。いけばなの発祥からはじまり、基本の花型、刺す位置や高さの決め方などについて、教えていただきました。花型には3つの規定があり、その割り出し方などはややこしく思えるのですが、花に触れているとやはり気持ちやすらぎます。また、みんなが同じ花で同じように生けているのに、それぞれちがってくるのがまた不思議。先生もひとりひとりを回って丁寧に指導、手直しをしてくださいました。

楽しく貴重な文化体験となりました。

11月・12月・1月の行事

11月18日	介護予防サロン（手稲前田）
11月29日	介護予防サロン（もみじ台）
12月6日	介護予防サロン（もみじ台）
12月7日	しめ飾りづくり①
12月14日	しめ飾りづくり②
12月16日	介護予防サロン（手稲前田）
1月17日	介護予防サロン（もみじ台）
1月20日	介護予防サロン（手稲前田）

健康運動教室

楽しく健康維持



9月25日に開かれた健康運動教室は、はじめてラダーウォーキングに挑戦しました。ラダーウォーキングは、北海学園大学名誉教授の竹田憲司先生が考案した運動で、歩行能力の改善、転倒防止、脳の活性化などの効果があります。床に敷かれたはしご（ラダー）の内側と外側を交互に踏む、手をたたく、片足バランスで止まる、など様々な変化をつけて行われます。誰かが間違つたときに笑い声や声援が起きたり、教えあったりして、終始なごやかな雰囲気が進められました。

参加した帰国者は「家ではなかなか体を動かすことができないから、よかった」と話していました。

教室の終わりに、「歳をとって体が動かなくなるのは仕方がないこと。失ったものをくよくよするのではなく、今できることをできるだけ長く保てるようにしましょう」と先生は話し、参加者のみなさんを励ましていました。

編集後記

今回文化祭で上映された帰国者の日本語スピーチは、とても短いものでしたが、背後に色々な思いを抱えていることが伺えました。語り部巻口清美さんの「帰国者ひとりひとりに重みのある生涯がある」という言葉と重なりました。

また今号では、稚内での事業と支援者についても紹介させていただきましたが、記事を作成後に、帰国者支援への尽力が評価され、古川章子さんが稚内市政功労者に選ばれたとの知らせを受けました。古川さん、おめでとうございます！